

福大病院ニュース

2007 季刊

秋号

No.61



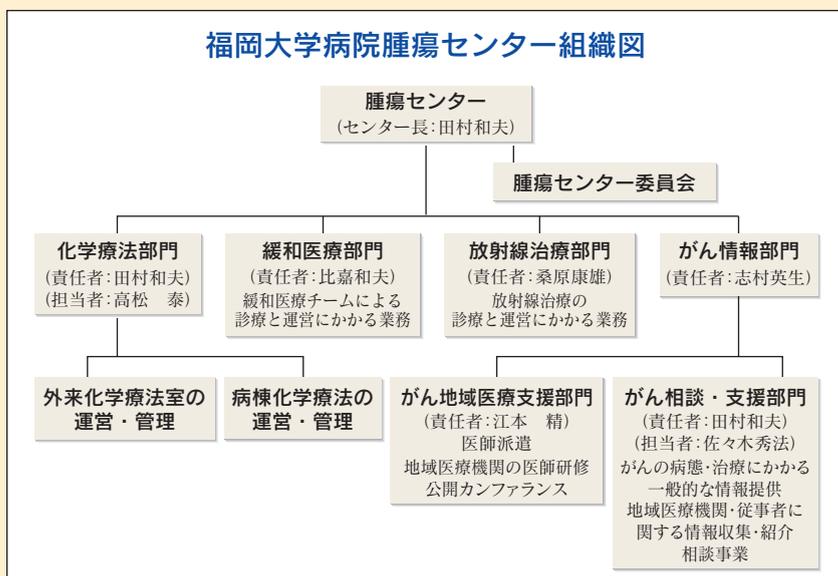
腫瘍センター長
医師 田村 和夫
(腫瘍・血液・感染症内科)

腫瘍センター開設にあたって

1981年から、がん（悪性腫瘍、悪性新生物、悪性疾患）は日本人の死因の第1位であり、一生のあいだに2人に1人が何らかのがんにかかります。がんは老化と深い関係があり、急速に進む日本の高齢社会のなかで重要な健康問題となっています。そういった中で行政としては、2007年4月より「がん対策基本法」を施行し、文部科学省は医学部、大学院教育のなかで腫瘍学の導入や専門医の養成、厚生労働省は地域がん診療連携拠点病院の整備を進めてきています。当病院としても社会のニーズにこたえるために、がん患者さん一人一人の社会的、経済的、精神・身体的背景を考慮にいれ、がんの診断から治療、合併症対策、支持療法、緩和医療を総合的に行うための体制作りをしております。実際の診療にあたりましては、がん専門の医師、看護師、薬剤師その他のコメディカルがチーム医療を展開し、また各専門家がそれぞれの専門性を最大限発揮して各患者さんを診療していく集学的治療を実践しております。

また、各患者さんに必要な医療は、一つの病院で解決できない場合も多く、福岡市西部地域・糸島を中心に一般病院・診療所あるいは緩和病棟を持つ病院と密接な連携をとりながらがん医療を展開していく必要があります。さらに、がんに関する情報を提供し、患者・家族の方の疑問に答える相談・支援も当院のつとめであり、このようながんの診療は多岐にわたり、がん患者さんを総合的に診療できるセンターが必要となります。そこで当病院では本年5月より腫瘍センターを開設し、左図に示しますように4つの部門をおき、その充実をはかっています。まだセンターとして独立した場所はありませんが、4部門がネットワークを作り皆様の要望にこたえていきたいと考えています。ご意見等ございましたら、院内に設置しております「御意見箱」あるいはe-mail:shuyo@adm.fukuoka-u.ac.jpを利用ください。

福岡大学病院腫瘍センター組織図





医師 高松 泰
(腫瘍・血液・感染症内科)

化学療法部門について

白血病、悪性リンパ腫などの血液腫瘍や精巣腫瘍では、化学療法（抗がん剤治療）により治癒することが期待できます。肺癌、胃癌、大腸癌、乳癌、婦人科癌などの固形腫瘍では、手術的に癌をとったあと、取り残したり遠くに飛んでいった目には見えないぐらいの小さな腫瘍が化学療法をすることによって治る患者さんが増えています。これをアジュバント（補助）療法と言います。また手術で完全に取りきれない場合や再発した場合に化学療法を行うと、腫瘍が縮小・消失して痛みなど腫瘍に伴う症状が改善されます。最近では腫瘍細胞が正常細胞と比べてよりたくさん持っている蛋白や異常遺伝子を標的とした「分子標的薬」と呼ばれる薬剤の開発が進んでいます。分子標的薬は腫瘍細胞に対して特異的に作用するため、正常な細胞には影響が少なく効果が強くでることが期待されます。このような抗がん剤の進歩にとともに、様々な腫瘍に対して化学療法が実

施されるようになっていきます。その一方、化学療法には副作用があります。化学療法部門では、医師、看護師、薬剤師が協力して、化学療法を安全かつ適正に実施できるように取り組んでいます。

化学療法を行う前に、担当医は治療全体の内容を、がん専門薬剤師は薬剤について詳しく説明を行います。特にいつごろどのような副作用が起こるかを予測し、予防策を立てて治療に臨むことが重要です。治療の際は、担当の医師だけでなく看護師、薬剤師が別々に薬の種類と量の確認を行い、複数の眼で確認することで、うっかりミスを防ぎます。外来で治療を行う場合は、化学療法専用の部屋（外来化学療法室）を使用して、専任の看護師が担当医と一緒に治療を行います。看護師は化学療法に関する専門的な知識を持っていますので、わからないこと、不安なことなど、何でもご相談下さい。



医師 廣田 一紀
(麻酔科)

緩和医療部門について

緩和医療は、終末期に限った医療ではありません。現在の緩和医療は、がんを疑われたり、がんという診断がついた時点から患者さんやその家族に対する緩和・支持療法を行なう医療です。緩和医療は決して消極的な医療ではなく、痛みや精神的な症状などのさまざまな苦痛に対し迅速な対処を行い、生活の質を向上させるのです。WHO（世界保健機関）も、がんの初期から早期の緩和ケアの導入を強く提案しています。

福岡大学病院では2006年4月より入院患者さんに対し、緩和ケアチームが中心となり緩和医療を提供しています。われわれのチームは麻酔科、精神神経科、腫瘍内科の医師、看護師や薬剤師、と多種のメンバーで構成されており、痛みに対してはもちろん、精神面での苦痛や化学療法や放射線治療などががん治療の副作用対策、細かな服薬指導などを行なっております。当院の緩和ケアチームはコンサルテーション型のチームで、

専門病棟を持たずに依頼された病棟に出向く形をとっています。毎週月曜にカンファレンスと各病棟への回診を行なっています。昨年1年間の新患依頼件数は76人、年間管理症例は合計で293人でした（図1、2）。当院には緩和ケア病棟やホスピスはありませので、終末期医療専門の施設を希望される方の転院や、在宅医療への移行などの支援にも関わっています。

緩和医療は比較的新しい分野で、医療従事者にもまだ十分に浸透していません。そこで、院内での勉強会や講演会を積極的に行ないわれわれも正しい知識を身に着け、少しでも皆様のがんの苦痛を和らげることができるよう心掛けております。

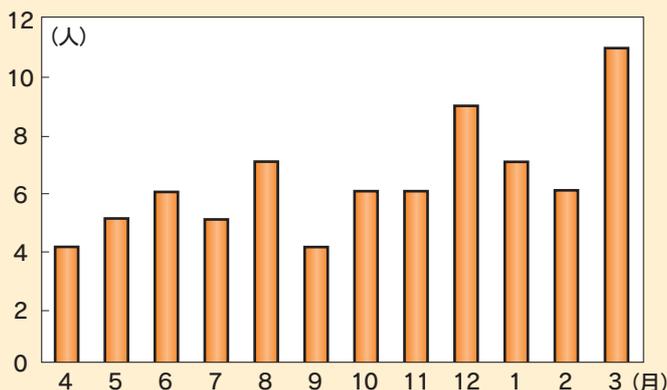


図1. 月別新患数(計76人) 2006年度

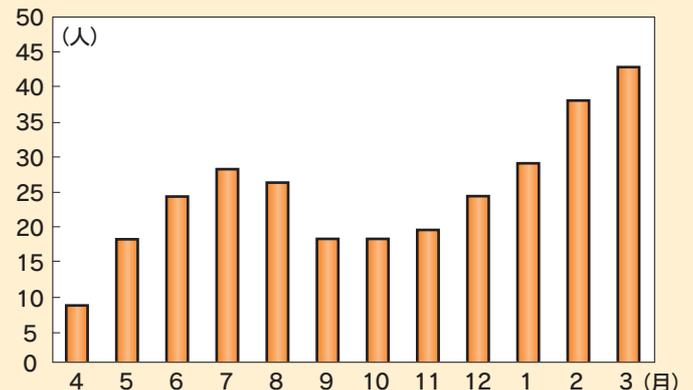


図2. 月別管理症例数(計293人) 2006年度



医師 桑原 康雄
(放射線科)

放射線治療部門について

放射線治療は、近年のコンピュータ技術の発達とともに、目的とする部位(腫瘍など)に多くの放射線を集中し、その周囲への被ばくを低減する様々な技術が開発されています。その代表的なものが、3次元原体放射線治療(3 dimensional conformal radiotherapy, 3DCRT)です。この治療の特徴は、多分割絞りと呼ばれる装置で放射線の形状をターゲットに沿ったものに変え、正常組織の被ばくを少なくできることです。3DCRTの普及により、副作用を軽減し、安全に、そしてより効果的に治療できるようになっています。福岡大学病院では、前立腺癌、頭頸部腫瘍、肺癌などの放射線治療にこの技術を積極的に活用しています。

また、福岡大学病院では、本年11月より、体幹部定位放射線治療を開始する予定です(図)。これは、“ピンポイント照射”として

知られており、精度を高めるために、からだ動かさないように専用の固定具で固定し、放射線を6-8方向から1点に集中して治療するものです。サイズの小さい肺癌、肺転移などに用いられ、従来の放射線治療に比べて、より高い効果を発揮します。

からだへの負担が少ない放射線治療は、悪性腫瘍の治療に重要な役割を果たしています。今後とも西日本の最先端の放射線治療施設のひとつとして、よりよい医療を提供できるよう、努力してまいります。



医師 志村 英生
(医療情報部)

がん情報部門について

がん情報部門は、がんに関するいろいろな情報を提供して患者様やその家族、医療関係者へがん関連医療の支援をします。がん治療や連携に力を入れている医師、看護師、薬剤師、事務系職員、ボランティアなどが協力してこの情報部門を支えています。

部門の活動内容は次の二つに分かれています。

実際の患者様の治療を地域のいろいろな病院間での連携を支援する「がん地域医療支援部門」と、がんの治療の情報をお知らせする「相談・支援部門」とがあります。がんの診断治療の一般最新情報や福岡市西南部を中心とした地域のがん診療状況、各病院や診療所でのがんの治療のとりくみ状況などの情報を提供し支援します。また福岡大学病院でのがん登録をおこなって、がん発生の地域情報や治療やその後の経過などの解析を行います。それを含めた福岡大学病院での各種がん治療の状況、専門家の情報などを提供いたします。

1) がん地域医療支援部門

地域の医療機関からの患者様の紹介受け入れや患者様の状態に適した地域医療機関への逆紹介などを支援します。症例相談や診断治療の依頼等がより円滑に行えるように、地域がん診療連携拠点病院内外の医師との連携体制を支援します。関係各診療科と相談して、その地域で必要ながん診断・治療専門医師を育成し派遣するお手伝いをします。一般市民向けの公開市民講座及び地域医療機関従事者を対象としたセミナーや地域がん診療連携研修会の開催などを支援します。

2) がん相談・支援部門

各種がんの病態、標準的治療法などがん診療にかかわる一般的な医療情報を分かりやすく提供します。患者様、地域の医療機関、かかりつけ医などを対象とした意識調査などを行い、この地域における、かかりつけ医や各病院との連携に関する情報を収集します。そしてこの地域の医療機関や医療従事者に関する情報を紹介し、セカンドオピニオンの提示が可能な医師の情報を提供します。

がん相談・支援部門について



医師 佐々木 秀法
(腫瘍・血液・感染症内科)

がん相談・支援部門は、患者さんへのがんの病態・治療にかかる一般的な情報提供や相談事業を展開する部門です。中心に進めていくメンバーの構成は、医師、看護師、薬剤師だけでなくボランティアの方にも協力していただいております。活動内容は、がん診療に関する情報の提供、がんセミナーの開催、パンフレット、本、雑誌によるがん情報の提供、当院の診療科の紹介、適切な医療機関の紹介（診療依頼、セカンドオピニオン）を行っております。これまで、がんセミナーを2回開催し、今後も月1回程度ずつ開催していく予定です。また現在外来化学療法室のパンフレット、本、雑誌の整備を進めております。また、周囲の医療機関の情報を収集し、地域連携室を通して情報提供できるよう準備を進めております。

がん患者さん・ご家族の方々でお悩みやご相談のある方、がんに関する不安や疑問のある方、医療費や在宅療養に関してご相談のある方、治療に関する医療相談およびセカンドオピニオンを受けてみたい方、または受けられる施設を知りたいなど、がん医療に関するさまざまな問題解決のお手伝いをさせていただきます。お気軽に相談窓口、地域連携室、e-mail等でおたずね下さい。

がん地域医療支援部門について



医師 江本 精
(産婦人科)

この度、福岡大学病院に『腫瘍センター』が設置されました。『腫瘍センター』＝「がんセンター」と理解して頂いて構いません。実は、わが国は世界で最も長寿国の一つなのですが、3人に1人が「がん」で亡くなっているという深刻な現状があります。「がん」で亡くなる人の割合は先進国の中でも高く、今後も「がん」で亡くなる人は年々増加することが危惧されています。そこで、4月に制定された「がん対策基本法」に基づき、福岡大学病院も本格的にがん制圧に向けて動き出しました。この度設置された腫瘍センターの中に「がん地域医療支援部門」があります。わが国には、納得できる治療が受けられず病院を転々とするがん患者が少なくありません。したがって、この部門の役割は、福岡大学病院と地域の医療機関の連携を促し、地域のがん患者の治療全体ができるだけ円滑に行えるようにする事です。また、意外な気がしますが、わが国は先進国の中でも、がん検診の受診率が低く（乳がん、子宮がんや大腸がん）、とても問題視されています。子宮がんが若年化している現状もこれに関連しています。本部門は、がん検診の受診率を上げるための公開講座等も企画しています。また、適切な医療施設で二次検診（精密検診）が迅速に行えるような指導にも努めます。

がん地域医療支援部門

地域の医療機関と連携し、情報提供、検診指導、研修、公開カンファレンス等を行います。



更に、地域におけるかかりつけ医との緩和医療の連携や医師の派遣を促して行くことも我々の大きな仕事の一つと考えています。福岡大学病院の各々の診療科がこれまで作り上げ、維持・更新してきた地域関連病院とのネットワークを十分に活用して、がん地域医療支援の向上に努めたいと考えています。先月、「福岡大学病院がん地域医療支援部門」のスタッフの陣容をほぼ固めることができました。私を含め、主体となる診療科から募った担当医8名、外来看護師2名、薬剤師1名、医療情報部医師1名の計12名からスタートしました。また、第1回のがん地域医療支援講座を「オンコロジーナース・ファーマシスト養成講座IN 山口」として、9月28日に下関市の海峡メッセ下関で開催することが出来ました（田村センター長、他、講演）。スタートしたばかりですが、福岡大学病院を軸としたがん地域支援を積極的に推進して行きたいと考えています。

【診療受付時間】

◎初診：(月～土) 8時30分～11時00分

◎再診：(月～土) 8時30分～11時00分

※休診日：日曜・祝祭日・盆休(8/15)・年末年始(12/29～1/3)

福岡大学病院

〒814-0180
福岡市城南区七隈七丁目45-1
TEL (092)801-1011(代)

発行：医療情報部 URL：<http://www.hop.fukuoka-u.ac.jp/>

